

食卓生活史の調査と分析 : 食卓生活史調査のまとめ

著者	井上 忠司, Inoue Tadashi, イノウエ タダシ, 熊倉 功夫, Kumakura Isao, クマクラ イサオ
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	016
ページ	121-122
発行年	1991-12-25
URL	http://doi.org/10.15021/00003586

5 食卓生活史調査のまとめ

井上 忠司*・熊倉 功夫**

われわれの聞き取り調査のねらいは、従来もっとも手つかずのままだった「民食—内食」（家庭内のふだんの食事）の研究領域にわけいって、現代（20世紀——とりわけ前半の）日本における家庭の食卓の情景をあきらかにすることであった。われわれは銘々膳からチャブ台への時期を中心に、量的分析をとおして全体的にとらえるようつとめ、質的分析をとおして、なるべく被調査者のなまの証言を生かしながら、より具体的に描きだすようつとめてきたつもりである。

この食卓生活史調査は、なにしろわが国で初めての試みである。われわれの実験はある意味で、大がかりな予備調査であった、といえなくもない。解決しえた問題よりも、むしろ残された課題のほうが気がかりではある。そこで以下においては、これまで触れえなかったいくつかの問題点を指摘して、調査のまとめにかえたいとおもう。

第1点は、チャブ台の呼称をめぐる地域差の問題である。われわれは総称して「チャブ台」とよんできたが、実際にはその呼び名は一様ではなかった。「飯台」もあれば、「シッポク（またはシップク）台」もあった。「おぜん」もあれば、「おつくえ」とか「しょく（食）台」もあり、ただたんに「台」とだけよんでいた家庭もあったようである。

われわれは当初、チャブ台の呼称と都道府県別（被調査者のチャブ台使用時の場所）との相関を知りたいとねがって、いちおうデータを検討してみたが、なにぶんにもサンプル数が少なすぎて、明快な結論を得るにはいたらなかった。しいていえば、「シッポク（またはシップク）台」という呼称にのみ特徴がみられ、東京都（2）、京都府（1）、大阪府（2）、兵庫県（3）、奈良県（4）の、いわゆる先進県にかぎられていたことである（かっこ内の数字は件数）。

第2点は、われわれの分析では椅子式テーブルの時代の考察が、総じてよわいことである。われわれの調査が70才以上の女性を対象をしぼり、銘々膳からチャブ台への

* 甲南大学文学部 国立民族学博物館 第1研究部（客員）

** 筑波大学歴史・人類学系

時代に焦点をあわせたことからくる、当然の帰結でもある。テーブル時代の実態は、もうすこし調査の仕方（たとえば対象など）を工夫して、精確にとらえる必要があるだろう。

「現代日本文化における伝統と変容」という文脈でいえば、現在のテーブル時代は、それまでの伝統的な生活文化がことごとく解体もしくは危機に瀕して、おおきな変容を余儀なくされている時期である。ほんの一例をあげれば、食卓の情景においても、ハレとケの区別があいまいになってしまった。大正3(1914)年うまれのとある女性(No. 243)は、いみじくもこう語っている。昔を思うと、「今は毎日がお正月だ」と。

第3点は、われわれの調査では、コタツのあつかいがやや不明瞭だったことである。行火ゴタツはチャブ台とおなじカテゴリーにぞくしよう。だが、掘りゴタツともなれば、もはや椅子式テーブルに近いのである。食卓としてのコタツのあつかいは、あんがいむつかしい。

冬のあいだは、食事の際にこのコタツを使用または併用している家庭がおおい。コタツはまた、食卓と同様に、一家団らんの装置でもある。コタツ文化の実証的な研究は、別に工夫されねばならないことを、あらためて痛感した次第である。

最後に、われわれの調査が、被調査者の方がたにおおいに歓迎されたものであったということを、一言つけくわえておきたい。各種の調査が被調査者に迷惑がられ、嫌われがちな今日、これはまことに希有なことといわなければならないだろう。

日ごろは話もろくに聞いてくれない孫たちの世代の若者が、お年寄りの生きられた歴史に熱心に耳をかたむけ、教を請うのである。お年寄りのうれしそうな表情が、記録の行間ににじみでていた——としても、ふしぎはなかりう。

いっぽう、ある女子学生(No. 180)は、わざわざ付記をしたためて、こんなふう書きとめている。調査者の若者たちにとっても、あの体験は、ころにつよい印象をとどめたようである。

高校までは勉強というものは「教科書なしにはできない」というかんじでした。ところがこの調査を通して教科書なしで、しかも生身の人間を相手にする、能動的な「勉強」を知りました。昔のように「やらされている」のではなく、「やっている」という手ごたえと、はねかえってくる力を感じました。

われわれはいま、この若者の言葉をいくども反すうし、いたく噛みしめながら、われわれ自身の問題として重く受けとめているところである。